プラン・ニュース［2021 Autumn］NO.118

PLAN NEWS



国際ガールズ・デー特別インタビュー

サヘル・ローズさんが今、女の子に伝えたいこと

プラン・スポンサーシップ

自分の人生は自分で選ぶ

グアテマラ

先住民族の女の子の生計向上

スーダン

難民の子どもたちが笑顔で学べる環境作りが進行中

発行：公益財団法人プラン・インターナショナル・ジャパン

国際ガールズ・デー 特別インタビュー

サヘル・ローズさんが今、女の子に伝えたいこと

俳優業のかたわら、女の子支援などさまざまな社会貢献活動にも取り組んでいるサヘル・ローズさん。「女の子だからと夢をあきらめるのは止めよう」、「社会からの抑圧に負けず、おかしいと思ったら声をあげよう」。世界中の女の子や女性たちにむけて、温かいエールをくださいました。



チャイルドのアナちゃんと一緒に

Profile

さへる・ろーず：俳優、タレント。1985年イラン生まれ。8歳のときに養母とともに来日。高校時代から芸能活動を始め、イタリア・ミラノ国際映画祭にて最優秀主演女優賞を受賞。芸能活動以外にも、国際人権NGOの「すべての子どもに家庭を」の活動で親善大使を務めている。映画監督としても活動を始め、児童養護施設の子どもたちと制作した作品が来年公開予定。

女性たちが声をあげはじめたことが希望につながる

――2018年からプラン・スポンサーシップにご協力いただいています。女の子や女性支援に興味を持たれたきっかけは何ですか。

サヘル・ローズさん（以下、サヘル）母の存在が大きいですね。イラン人でテヘラン大学の学生だった母は勉強が大好きで、大学院を出て教授になるつもりでした。しかし、イラン革命が起きて女性は弱い立場に立たされることになり、勉強を続けることはできなくなりました。女性だからというだけで、母が夢も目標も奪われたというのが悲しくてたまらなかった。次世代の女の子たちには、母と同じような思いはさせたくないと考えるようになりました。

――国際ガールズ・デーは、「女の子の権利」や「女の子のエンパワーメント」の促進を呼びかけるものです。今年で10回目を迎えますが、女の子を取り巻く環境はどのように変わったと考えますか。

サヘル　多くの支援団体の活動やSDGsの普及により「女の子の権利」は社会で認知されるようになったと思います。ただ、ファッションやトレンドのように捉えられがちなのを懸念しています。女の子が抱える問題の本質まで調べたり勉強したりしようとする人がもっと増えたら、状況はより改善されるのではないでしょうか。一方で、#MeToo運動に代表されるように、女性たちが声をあげるようになったのは良い変化だと思います。女性たちが発する言葉は、絶対にどこかで誰かが聞いている。声をあげ続けることが大切だと考えます。

――声をあげる女性が増えた一方で、声をあげられずに自分に自信が持てなかったり「女性はこうあるべきだ」という社会の抑圧に苦しむ人も少なくないようです。

サヘル　「20代のうちに結婚して子どもを産まなくてはならない」とか、女性は年齢ですることを決められてしまう風潮はいまだにありますよね。そういった誰かが決めた基準にがんじがらめになってしまうときは、旅に出て広い世界を知るのがおすすめです。コロナ禍でなかなか動けない間は、気になる人の自伝を読んだりドキュメンタリーを観るのでもいい。色々な価値観に触れることで世界が開けて、自分を抑圧していたものから解放されると思います。合わない靴を履いて道を歩いたら、靴ずれする。自分に合わない価値基準は脱ぎ捨てて、合う「靴」が見つかるまで探してみてください。困難な道かもしれませんが、寄り道や失敗は大成功。そこから必ず吸収できる。経験は財産です。

――2018年にチャイルドのアナちゃんに会いに、インドネシアのティモール島を訪問されました。その「旅」ではどんな気づきがありましたか？

サヘル　日本に比べたら経済的に貧しく、水も遠くまで汲みにいかないと手に入らない。そのような環境でも、アナや村の子どもたちの目がキラキラと輝いていて将来の目標や夢が明確だったのが忘れられません。貧困や教育を受けられないといった理由で、彼らの夢がつぶされるのは決して見たくない。物と情報にあふれた日本の私たちが、彼らのために自分ができることをする必要性に改めて気づかされました。

――具体的には、どのような行動が必要とされているでしょう。

サヘル　寄付をはじめ、SNSで女の子が抱える課題を発信することも大きな力になると思います。支援というのは寄付金額の大小にこだわらず、できることから始めるのが大切です。地球人という家族のなかに、困っている女の子がいる。その存在を忘れずに思いを寄せ、支えてあげたいという気持ちを持つことだって支援の立派な一歩です。

お節介になって地域で支え合うことから

――コロナ禍のなか、日本も含めて世界中で女性の孤立や貧困が問題視されています。彼女たちやその子どもたちのために、どんな支援が必要だとお考えですか。

サヘル　お節介を復活させることだと思います。私は来日したあと、小学生の頃に母と路上生活をしていた時期があるのですが、その時に助けてくれたのが〝お節介おばさん〟。小学校の給食のおばさんが、住まいのサポートから母に仕事を見つけることまでしてくれたのです。彼女の助けがなかったら、私も母もどうなっていたか分かりません。スマホにむけている時間を、少しでも近所や地域の人にむけて声をかけることに使う。それだけでも救われる人はたくさんいると思います。人というのは、迷惑をかけ合って寄りかかり合って生きていくものだからです。コロナ禍で、私も近所の単身の高齢者にペルシャ料理を作って持って行ったり庭に咲いた薔薇を差し上げたりと、お節介おばさんになってみました。すると、地域の人とより親密になって自分自身も得るものが多かったです。

――最後に、国際ガールズ・デーにむけて、世界や日本の女の子にメッセージをお願いします。

サヘル　生まれてきてくれて、ありがとう！　まずこうお伝えしたいです。なんで生まれてきたんだろうって、今追い込まれている女の子がいるかもしれません。でも、人間は存在しているだけで十分価値があるんです。そして、「女の子だから」とあきらめず、自分の夢に向かって突き進んでほしい。頑張っているあなたの姿を見ている人は、必ずいます。



写真 / 坂本博和



カンボジアの孤児院を訪問した時の一枚。「真ん中の女の子が、帰り際に自分が写っている写真をくれました。『連れて行って。忘れないで』というメッセージなのだと思います」

国際ガールズ・デー 2021 イベント情報

詳細・申込はウェブサイトから

THINK FOR GIRLS
女の子たちが再び夢を描ける世界へ



2021年7月までエジプトカイロに駐在し、3年間にわたり中東アフリカの女の子や女性たちの取材に注力してきたNHK記者　柳澤あゆみ氏によるトークイベントをウェビナー開催します。ぜひご参加ください！
開催日：10月8日（金）20:00-21:15

「世界じゅうの女の子のための日 国際ガールズ・デーの本」絵本翻訳



国際ガールズ・デーに合わせて、カナダの絵本「International Day of the Girls」の日本語版が大月書店から出版されました。翻訳、監修、解説をプランが担当しています。世界各地の女の子たちが抱える問題に声をあげた9人の少女の物語です。

「性と生殖に関する健康と権利」を促進するためのプランの活動

自分の人生は自分で選ぶ

プラン・スポンサーシップの活動地域では「性と生殖に関する健康と権利」を促進するさまざまな活動が地域の事情にあわせて活発に行われています。各国の事例を紹介します。


自分たちの性について話し合うインドネシアの女の子たち

身体的、精神的、社会的な健康を維持し、正しい知識を得て、結婚、妊娠、出産などのタイミングを自ら決定することはすべての女性や女の子に与えられた権利です。これらのことを「性と生殖に関する健康と権利」、英語でSexual and Reproductive Health and Rights（ＳＲＨＲ）と言います。

本来ならばすべての人が享受すべきこの権利ですが、そうした社会の実現にはほど遠いのが現状です。

国や地域によって抱える問題が異なるなか、プランは地域の事情にあわせて、この現状を変えるべくさまざまな活動を実施しています。

CASE 01 INDONESIA インドネシア ルンバタ活動地域

大好きなゲームで遊びながら、性について考える

インドネシアの農村地域では、男性優位の慣習や、女の子や女性への教育の重要性が認識されていないなどの理由から、性に関する情報や教育を受ける機会が非常に限られています。そこで、ルンバタ活動地域では女の子と男の子、その保護者などを対象に「性と生殖に関する健康と権利」について学ぶ活動を行っています。

例えば、プランは、この地域の子どもたちに人気の「へびとはしご」というすごろくのようなゲームを子どもたちの教育用にアレンジしました。それぞれのマス目に性に関するクイズや情報が書いてあり、ゲームを通じて「性と生殖に関する健康と権利」についての知識を深めることができます。



「へびとはしご」ゲームを通じて、生理の時にはどうすれば良いのか、生理中はどんな気分になるのかなど、私たちの体や健康について学んでいます。

JAPAN 日本

プラン・ユースグループが包括的性教育について調査

プラン・ユースグループ※1では、日本の思春期の若者が受けてきた性教育について、また、若者から見た包括的性教育のニーズを調査する目的で、15～19歳までの約1,000人を対象にアンケートを実施し、報告書にまとめました※2。調査からは、4人に1人が「現在の教育カリキュラムにおける性教育は実践的ではなく内容が不十分である」と考えていることが分かりました。「包括的性教育」とは、性に関する知識だけでなく、ジェンダー平等、多様性など人権尊重を基盤にしたもので、近年導入の必要性が指摘されています。ユースグループでは、今後、省庁や専門家との対話などを通じて、包括的な性教育の実施を求めていきます。

VOICES
明日香さん（大学4年生）
プラン・ユースグループ

私はこれまでの学生生活で性教育を丁寧に受けた記憶はありませんでしたが、経験上、重要だと漠然と思っていました。そのなかで出会ったのが「包括的性教育」という概念です。包括的性教育はジェンダーや人権、人間関係など多岐にわたる学習プログラムです。この概念を無関心な方々にいかに知っていただけるかが課題であると考えています。

※1プラン・ユースグループには高校生から社会人のメンバーが所属し、日本国内の同世代に関する課題を発信する活動などにより、ユース・エンゲージメントを促進し、ユースの声が反映される社会の実現を目指します。 ※2「ユースから見た日本の性教育の実態調査報告書 -包括的性教育を目指して-」

CASE 02 KENYA ケニア タラカ活動地域

若者から若者への学びあいを通じて保健教育を強化

ケニアのタラカ活動地域では若者への性教育や情報が十分ではありません。多くの若者は知識がないまま、性行為や妊娠などの性に関する決断をせざるをえない状況です。プランは1,178人の若者を対象に、講習会とピア・ラーニング・グループ（仲間同士で学びあうグループ）を主催、「性と生殖に関する健康と権利」や避妊についての教育を行っています。

ピア・ラーニング・グループの若者たちは、年下の参加者に知識を伝え学びあうなかで、リーダーシップを取ることができるようになりました。 メンター・セッション（ピア・ラーニング・グループで指導する若者への研修）では、若者同士を紐でつなぎ互いに協力してほどくというゲームを通じて、チームワークや信頼感を高められるようになりました。性やジェンダーなど話しにくいテーマでも、相手に自分の気持ちを率直に伝えあえる環境づくりにつながっています。



メンター・セッションでは、自分の身体や心を理解し、感情や問題にどのように対処すればよいのかが分かるようになりました。

CASE 03 DOMINICA ドミニカ共和国 アスア活動地域　サン・フアン活動地域

早すぎる結婚と妊娠の撲滅を目指すイベントを実施

アスア活動地域とサン・フアン活動地域では、若者たちに「自分の体について選択をする」という意識がありませんでした。 そのため、早すぎる妊娠や結婚を強制されることは、あたりまえのこととみなされていました。そこでプランは、「ゴッドマザー（教母）」と呼ばれる女性たちを対象に、「性と生殖に関する健康と権利」に関する研修を実施しました。

ゴッドマザーは、保護者や若者を支援する役割をになっています。また、コミュニティでイベントを開催し、親や教師、宗教指導者にむけて、女の子の権利の大切さと強制結婚の危険性についての意識喚起を行いました。

母親に性の相談ができない女の子もいますが、ゴッドマザーは私たちの年齢や現状を理解し、的確なアドバイスで私たちに自信を持たせてくれました。





「Girls, Not Wives（女の子であって妻ではない）」プロジェクトで早すぎる結婚がもたらす弊害を知りました。私たちにとってより良い未来のためにこのような慣習は終わらせます。

illustration by Noriyuki Goto

グアテマラ

先住民族の女の子の生計向上 農業で起業を目指すデイシの挑戦

男性優位の考えが強く残るグアテマラでは女の子が学んだり、
仕事の技術を身につけたりする機会がほとんどなく、特に農村部では深刻な問題です。
先住民族の女の子や若者たちが、農業で継続的に収入を向上できるよう、
プラン・インターナショナルが開始したプロジェクトを紹介します。



グアテマラ先住民族のデイシは18歳の女の子。「女の子は学校へ行く必要はない」という父親のもと、小学校修了後は忙しい母親に代わって家事をしています。

かわりばえしない日常のなかでも、好奇心旺盛なデイシは市場で色とりどりの野菜を見ることが大好き。自分でも野菜を育て、売ってみたいと思い、「うちで野菜を育てない?」と両親に伝えました。しかし、場所も時間もないと断られました。



ある日、デイシは母親から「地域で活動しているプラン・インターナショナルが、若者が農業で起業するための起業クラブをつくる」ことを聞きました。

母親は18歳で結婚して以来、家事と子育てをこなし、今では織物の仕事で家計を支えていました。娘にも将来役立つスキルを身につけてほしいと願っていたので、起業クラブは野菜に興味があるデイシにぴったりだと感じたのです。





起業クラブは、グループで計画、生産、管理を行い、売り方も考えるという、デイシが夢見ていたような内容でした。

しかし、メンバーは農業経験のない若者たちです。社会の仕組みも知らなかったデイシにとって、「農業で起業」する計画づくりは、泣きそうになるほど大変でした。

トレーナーからの助言を受けて作り上げた計画を経済省と市に発表し、アドバイスをもとに作り直してついに事業としてスタートすることができました。



デイシたちはトマトを作り始めました。トマト作りは楽しくても、どのくらい作って、どこでどうやって売るか、それを管理するのはとても難しい作業です。そのためクラブでは若者たち一人ひとりが、その手順や管理について理解し、記録できるようなトレーニングを行いました。

初めはあまり乗り気でなかった若者も積極的にクラブに参加するようになり、意見を出し合い、議論し、試行錯誤を繰り返しました。そして、グループで初めてのトマトを収穫することができました。



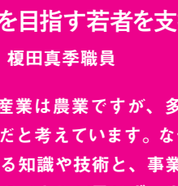
デイシたちの暮らす地域では「地産地消」を進めています。グループのトレーナーは市や教育省に、小学校の給食にデイシたちのトマトを使ってもらおうと働きかけています。

給食にデイシたちのトマトが使われる日も遠くないかもしれません。「わたしたちの野菜をもっとたくさんの人に食べてもらうために、これからも活動を続けていこう!」とデイシたちは意気込んでいます。

新しいガールズ・プロジェクトがスタート!

●スキルを身につけて自立を目指す
「先住民族の女の子の収入向上」プロジェクト（グアテマラ）

ご寄付や活動詳細についてはウェブサイトをご覧ください



農業で生計向上を目指す若者を支援し、地域全体の活性化へつなげます

解説：プログラム部　榎田真季職員

グアテマラの主な産業は農業ですが、多くの人が「儲からない仕事」だと考えています。なぜなら、農業の生産性を高める知識や技術と、事業戦略立案や管理を行うためのスキルが足りず、生産者と購入者のネットワークが弱いため農産物の販路を広げにくいという背景があるからです。

このプロジェクトでは起業や小規模農業の改善を希望する若者が起業クラブと小規模農業クラブを設立し、農産物生産の技術向上や事業管理のためのトレーニングに参加します。販路拡大のために、農産物の認定証取得や登記の支援、学校への販売促進や購入者との関係づくりなども行います。

コミュニティに建設した農産物出荷センター2棟は、トレーニングに参加した若者だけでなく地域の住民も使用できます。こうしてコミュニティ全体の農業の活性化も目指しています。

本事業は外務省（NGO連携無償資金協力）の支援を受けて実施しています。

スーダン

難民の子どもたちが笑顔で学べる環境作りが進行中

新型コロナウイルス感染症のため、スーダンでは2020年3月から9カ月間にわたって学校が休校となりました。学校が再開しても、安全な水や石けん、適切なトイレがある公立学校は全体の半数以下※1と衛生的な状態にはなく、また難民キャンプ内の学校でも同様に衛生設備が必要です。プラン・インターナショナルによる、より安全な学校再開をサポートする活動について紹介します。



学校で学ぶ女の子たち



スーダンってどんな国？

スーダンは近年、年率300%を超える激しいインフレにより物価高騰が著しく、国家財政も人々の暮らしもかなり厳しい状況です。そのような中、西部ダルフールにおける国内紛争や、繰り返し発生する干ばつや洪水などによって約255万人が国内避難民として家を追われ※2、同時に南スーダン、エリトリア、シリア、エチオピアなどから110万人弱の難民を受け入れているなど※3、国際社会の支援を多く必要としています。



子どもたちと一緒に写真を撮るプランのスタッフ

学校のトイレと手洗い場はほとんど整備されていない

白ナイル州（ホワイト・ナイル）には10カ所の難民キャンプがあり、約20万人の南スーダン人が暮らしています（2021年6月時点）。キャンプの人口密度は高く、キャンプ内の基礎教育学校（日本の小学校1年から中学校2年に相当。8学年）では、1教室で100人を超える生徒が同時に学ぶこともあります。そのため生徒の数に対してトイレの数が足りず、国連やNGOなどが協力して学校へのトイレ設置をすすめていますが、いまだに4つのトイレを2500人ほどの生徒で共有する学校もあるなど、設置が追い付いていない状況です。

難民キャンプに隣接する村の学校は、さらに劣悪な環境です。キャンプがあるエルサラームとエルジャバリン地区は、州都から離れていることもあり、政府による開発もあまり行き届いていません。4年以上基礎教育を受けた人の割合はそれぞれ57%、82%と、白ナイル州で最も低い地域の一つです※4。適切なトイレがひとつもない学校も多く、ほとんどの学校には手洗い場がありません。このため「難民キャンプの学校の方が環境がよい」とうらやましく感じる人もいます。難民受け入れ地域の住民と、難民の人たちの良好な関係を築くうえでも、このような格差は是正していく必要があります。

コロナ禍でより重要となる学校の衛生環境整備

コロナ禍で安全に学校を運営していくためには、安全な水やトイレなどの衛生環境設備が重要です。水やトイレがないことは新型コロナウイルスに感染するリスクを高めるとともに、生理中の女の子が学校を休む原因にもなります。学校は学業を学ぶだけでなく、感染予防や新型コロナウイルスなどの衛生に関する最新情報を得ることのできる場所でもあります。生理によって学校に通えなくなれば、コロナ禍で必要な情報を知る方法を一つ失うことにもなりかねません。

感染予防に関する指導を行うことは難民キャンプやキャンプに隣接する村の学校教員にとって、ほぼ初めてのことです。教育省によって「安全に学校を再開するためのガイドライン」が策定されましたが、それを実践するための教員研修はなく、現場の教員たちの努力にゆだねられています。また、障害やジェンダーといった子どもたちの多様なニーズに応じるための研修を受けている教員もほとんどおらず、キャンプ内の学校に勤務する教員の中には教員養成課程を修了していない人もいます。この状況に対応するため、教員たちも新しい学びのトレーニングを必要としています。

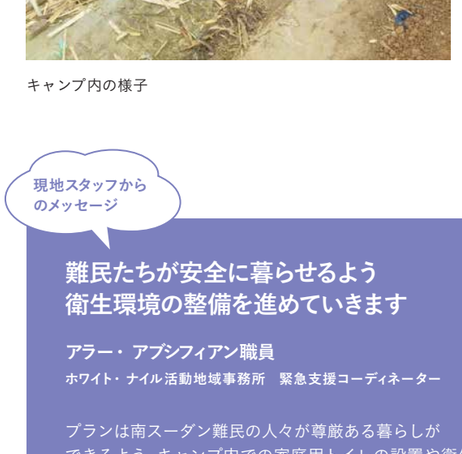
難民キャンプと隣接村でプロジェクトの活動を実施

学校の衛生環境の改善、そしてコロナ禍での安全な学びを目標として、このプロジェクトでは、4つの難民キャンプ内にある8校、およびそれらのキャンプに隣接する村の公立学校5校で以下の活動を行います。

- 安全な学校再開方法について、教員研修を実施する。教員と住民が感染流行に伴い懸念される虐待や児童労働、早すぎる結婚などのリスク軽減策に取り組む
- 保護者や地域の人たちと、子ども、特に女の子のリスク軽減策に取り組む
- 衛生設備がないキャンプに隣接する村の学校を中心に、トイレや手洗い場を設置する
- 女の子たちが学校に通い続けることができるよう、960人の女子生徒に対し生理用品キットを配布する

活動内容は今後の感染状況や感染予防に対する政府規制などによって大幅に変わる可能性もあります。その際にはウェブサイト等で適宜ご報告します。

※1 UNICEF Fact Sheet: Education within COVID-19
※2 UNOCHA Sudan https://www.unocha.org/sudan
※3 UNHCR https://data2.unhcr.org/en/documents/details/87826
※4 Sudan S3M Ⅱ (2018): Report of a Simple Spatial Surveying Method S3M Ⅱ in Sudan. Federal Ministry of Health, Sudan.



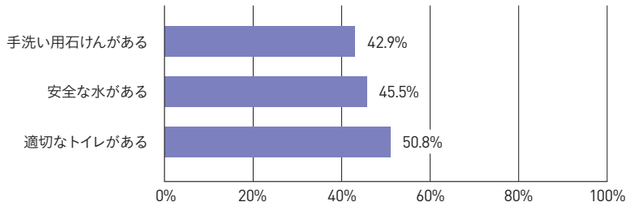
キャンプ内の様子



難民キャンプに隣接した村の学校トイレ。保護者たちによる手作りのトイレがあったが、風雨により屋根や壁といった上部構造は完全に壊れてしまっている

スーダン政府が2019年に全国の学校を対象に行った調査

（UNICEF Fact Sheet: Education within COVID-19を元に作成）



約半数の公立学校では手洗いやトイレなどの設備が十分ではない。今回のプロジェクトで支援するキャンプ隣接村の学校5校は、どこも手洗い場が設置されておらず、3校には適切なトイレがひとつもない

現地スタッフからのメッセージ

難民たちが安全に暮らせるよう衛生環境の整備を進めていきます



アラー・アブシフィアン職員
ホワイト・ナイル活動地域事務所　緊急支援コーディネーター

プランは南スーダン難民の人々が尊厳ある暮らしができるよう、キャンプ内での家庭用トイレの設置や衛生啓発活動などを行ってきました。女性や子ども、障害がある人や高齢者など、脆弱な人々が取り残されることのないよう、細心の注意を払いながら活動しています。国内ではプロジェクト車両のガソリン調達に苦労するほど経済状況が悪化し、加えて新型コロナウイルスの流行でプロジェクト運営もさらに難しくなっています。7月下旬には豪雨による洪水のため難民キャンプで暮らす数百世帯が被災し、衛生環境のさらなる悪化が懸念されます。水害後に発生しがちな下痢やコレラといった病気が蔓延しないよう対策をするなど、難民の人たちが健康的な環境で暮らし、そしてすべての人々の生活がより良い方向に変わるように活動をすすめていきます。

新しいグローバル・プロジェクトがスタート！

子どもが健康に学べるように
「南スーダン難民の保健衛生」
プロジェクト

ご寄付や活動詳細についてはウェブサイトをご覧ください





豊島株式会社
東京2部2課
藤田真衣さん

豊島株式会社
東京2部2課
大川侑穂さん

世界の女の子・女性の課題に「ファッション」で支援を続ける

オーガニックコットンを使った衣類や吸水ショーツを通じて、
女の子への支援を続けていただいている繊維商社、豊島株式会社。
支援に込める思いをうかがいました。



部署の異なる女性社員が集まり、企画から素材の開発、デザイン、制作までを手がけています

女性社員による新ブランドで支援

弊社では2015年からプラン・インターナショナルの「Because I am a Girl」に賛同し、オーガニックコットンを普及させる「オーガビッツ」プロジェクトを通じて、ガールズ・プロジェクトへの寄付を続けています。環境や体にやさしい衣類の売り上げの一部が「世界の女の子の生きる力」を支える寄付につながる仕組みは、お客様からも喜んでいただいています。このたび2021年2月に自社ブランド「Hogara（ホガラ）」を立ち上げ、「オーガビッツ」プロジェクトと同様に商品の売り上げの一部を寄付しています。

「Hogara」は女性社員7人の「私たちが今ほしいもの」を作ろうという思いから始まりました。そのなかで、それぞれがもつ生理への不満、たとえば「長い会議中はナプキン交換ができない」「ムレやニオイが気になり仕事に集中できない」といった負の部分を共有し、繊維のプロとしての素材知識や技術を活かし、「私たちだからこそ作れる」という思いで開発に取り組みました。

こうして生まれた「Hogara」の第一弾商品はオーガニックコットンを使った吸水型ショーツです。生理にまつわる悩みを解決する商品だからこそ、女の子の支援にぴったりだと考え、「Hogara」ブランドとしても寄付を始めることにしました。

「生理の問題」に対する選択肢になれる商品

弊社では営業で働く女性が増えていますが、男性営業の人数の方が圧倒的に多く、開発当初は社内で生理を話題にするのに恥ずかしさがあり、メンバー同士小声で話すなど気後れのようなものも感じていました。

商品開発を進めていくなかで、男性社員の生理への理解も深まりました。たとえば生理の時の体や感情の変化、生理痛について「そんなに大変だということを初めて知った」などの声も聞くようになり、社内の空気も徐々に変わっていきました。「生理の貧困」が話題になったのも追い風になり、今では当たり前のこととして生理について話せるようになっています。

最近は環境意識が高まるなか、ナプキンを廃棄物として捨てることにストレスを感じる人もいます。そんな「生理の問題」に対して吸水ショーツは選択肢のひとつになり得るでしょう。途上国には生理中は学校に通えない女の子がいると聞きます。「かわいい」「ほしい」と思って手にした商品を使うことで自分を思いやるだけでなく、はるか遠くに住む女の子たちにも思いをはせていただけると思います。

吸水ショーツの購入者は30～40代の女性が多いのですが、「そろそろ初潮を迎える娘に使わせたい」という意見もいただいており、今後は幅広いサイズ展開も視野に入れていきたいです。

「オーガビッツ」や「Hogara」を通じた社会貢献活動は、商品の持つ良さやコンセプトを消費者に伝えるために一役買っていると感じます。さらに、こうした活動を継続することは、弊社およびファッション業界全体を応援していただけることにつながるのでは、と考えています。





（上）ガールズ・プロジェクトからの支援で生理中も休まず学校に行けるようになりました(エチオピア)（左）柔らかい履き心地と明るい色でサニタリー期間を「ほがらか」に過ごせる「オーガニックコットン吸水型ショーツ」。吸水力やデザインが異なる4タイプがある

● お問い合わせ先　Mail：hello@plan-international.jp

ご支援の足跡を記念プレートに個別の報告書で成果を実感

2017年に開始した「一口100万円プロジェクト」では、4年間でのべ135人にご参加いただき、9つのプロジェクトを実施しました。「個」の力をあつめて大きなプロジェクトを実施するこの支援方法の魅力は、半年ごとにお手元に届く報告書で進捗や成果を写真とともに確認でき、ご支援者のお名前を記念プレートなどに残せること。多くの方に関心をお寄せいただいている本プロジェクトの具体的な手続きや、プロジェクト報告の流れについて紹介します。

プロジェクトの流れ

お問い合わせ

事務局から「ご支援手続きのご案内」などをお送りします

①プロジェクトのご案内（チラシ）・ご支援手続きのご案内
②「支援同意書」用紙・お振込みのご案内

お申し込み

「支援同意書」のご返送、およびご寄付のご入金にてお申し込み完了

・入金確認後、事務局から「寄付受領確認書」をお送りします
・プラン・インターナショナルへのご寄付は、確定申告をすると寄付金控除を受けられます

プロジェクト開始

「プロジェクトの概要書」および「プロジェクト開始のお知らせ」をお送りします

中間報告

「中間報告書」で進捗状況などをご報告します

・記念プレートに記載するお名前のご希望を伺います
・現地訪問（可能な場合）のご希望の有無を伺います※

プロジェクト完了報告

「完了報告書」でプロジェクトの実施内容、成果、支出、活動写真、現地の声などをお届けします

・現地訪問される場合は落成式などに参加し、プロジェクト成果をご確認いただきます※



タンザニアの小学校に設置された記念プレート



お手元に届く報告書。プロジェクトによりますが、6～18ページくらいのボリュームです

「一口100万円プロジェクト」は現地のニーズをもとに企画し、春と秋の年2回、『プラン・ニュース』に同封するチラシや、プランのウェブサイトでご支援者を募っています。約3カ月の募集期間中、プロジェクト実施地域では、支援内容の詳細や予算書の策定、開始時期などを確定します。詳細が確定したら、ご支援者に「プロジェクト概要書」をお送りし、いよいよ現地でのプロジェクトが始まります。

1年間のプロジェクトでは、開始から約8カ月後に「中間報告書」を、約14カ月後に「完了報告書」をお届けします。活動の進捗とその成果を、写真やプロジェクト参加者の声を交えてご報告します。また、プロジェクトで作られた施設や設備などに、ご支援者のお名前を付した記念プレートを設置します。現地事情が安定していれば、ご希望される方は現地を訪問して落成式などに参加し、成果を実際にご覧いただくことも可能です※。

現地の声



きれいな水をありがとうございます

ラムさん（小学校3年生／9歳）

きれいな水道の水を家で飲めるようになって、すごくうれしいです。今はちゃんと手を洗って、水で体もきれいにしています。お父さんとお母さんも、菜園の水やりなど、いろいろなことに水を使っています。支援してくれた日本の皆さん、本当にありがとうございます。

実施プロジェクト：「ネパールにおける給水設備設置および衛生習慣改善プロジェクト」ネパールのスンサリ郡で実施。12名の方のご支援により、給水設備・共同水栓・家庭用水栓の設置、保健衛生・月経衛生管理のトレーニングなどを行いました

● 現在は「ベトナムにおける少数民族の子どもたちの教育継続支援プロジェクト」を募集しています。詳しくは同封のチラシをご覧ください
お問い合わせ先　Mail: hello@plan-international.jp

※訪問には現地プランスタッフが同行します。かかる費用はご支援者のご負担となります。現地事情によりご訪問いただけない場合があります



遠い国の女の子の親になりました！

いつの日か自分の子どもたちを連れてチャイルドに会いに行きます

子どもの権利侵害の取材に力を注ぐ報道記者であり、自らも母である加古さんに、プラン・スポンサーシップでの交流についてお話をうかがいました。

スポンサー　**加古紗都子**さん
チャイルド　**コンジット**さん（6歳）／エチオピア



コンジットさんからの手紙。文章はまだ代筆ですが、アヒルの塗り絵がどんどん“進化”しています

子どもの人権を守るためジャーナリストの道へ

高校生のときから将来はジャーナリストになりたいと思っていました。大学時代にバックパッカーとして途上国を旅したとき、インドのムンバイで目にした児童売春の光景に大きなショックを受け、「小さな子どもが権利を奪われている理由が貧困であるという状況を何とかしたい」との思いから、ジャーナリストになる決意を固めました。

現在はＴＶ局の報道記者として、子どもの貧困や女性の人権問題を中心に取材をしています。最近はコロナ禍もあり国内の取材がほとんどですが、昨年はウガンダで、シングルマザーや元子ども兵を雇ってアフリカンプリントのバッグを作り、日本で販売するというプロジェクトをを取材し、特集として放送しました。

プラン・インターナショナルとの出会いは、「13歳で結婚。14歳で出産。恋は、まだ知らない」という交通広告。このコピーに衝撃を受け、プランのことを調べました。そして、途上国の子どもと手紙を通じて直接交流できる点に魅力を感じ、プラン・スポンサーシップでの支援を始めました。

以前から女性性器切除（ＦＧＭ）の問題に心を痛めていたので、チャイルドには、一部にその習慣が残っている「アフリカの女の子を」とお願いしました。紹介されたのは、エチオピアのコンジットさん。当時まだ4歳で、最初に送られてきた写真は緊張でこわばったような表情が印象的でした。彼女が暮らすコミュニティではＦＧＭは行われていないとのことで、とても安心しました。

チャイルドの成長を実感できるのが大きな喜びです

私は手紙とともに、夫とのツーショットや、家族写真の年賀状、かわいらしいシールなどを送っています。彼女からは、「将来はお医者さんになりたい」「近くの市場で両親のお手伝いをしています」など、芯のしっかりした女の子だなと思えるコメントとともに返事が戻ってきます。最近では写真の表情も笑顔になり、手紙の塗り絵もカラフルで複雑な色合いになってくるなど、彼女の成長が実感できることに大きな喜びを感じています。またコロナ禍で状況が変わる中にあっても以前と変わらずに手紙のやり取りを繋いでくださる現地と日本のスタッフの方々にも感謝しています。

我が家にはもうすぐ2人目の子どもが生まれますが、母子手帳にはコンジットさんの写真を入れていつも持ち歩いています。コロナ禍が終わり、私の子どもたちが大きくなったら、2人を連れて必ずコンジットさんに会いに行きます。またジャーナリストとしては、アフリカの状況をもっと日本に伝えるため、特派員として海外に行くことを目標にしています。



コンジットさん。2年ちょっとでこんなに大きくなりました

加古さんとコンジットさんのこれまでの交流記録

- 2019年 2月：コンジットさんに初めてのお手紙と、家族の写真を送付
- 5月：コンジットさんから初めてのお手紙が到着
- 9月：カレンダーキャンペーンからお手紙を出す
- 10月：お礼の手紙が到着
- 2020年 1月：家族3人の写真付き年賀状にメッセージを添えて送付
- 2月：コンジットさんからお返事が到着
- 7月：「1年のあゆみ」が届く
- 8月：コンジットさんにお手紙を送付
- 12月：コンジットさんからお返事が到着 加古さんからお返事を送付
- 2021年 3月：コンジットさんからお手紙が届く

アドボカシー

女性がリーダーとして社会を変革するために

プラン・インターナショナルは、２０２１年４月に男女２０００人を対象としたアンケート調査結果などをまとめた「日本における女性のリーダーシップ２０２１」レポートを公表しました。

レポート公表を記念して、６月17日に「日本で女性のリーダーが育つためには？教育が果たす役割を考える」をウェビナーにて開催しました。レポートの総評を行った特定非営利活動法人Gender Action Platformの大崎麻子さんからは、「日本における性別役割分業や、固定化されたリーダー像といった日本の『障壁』が浮き彫りになった」として「企業や政府に読んでもらいたいレポート」と評価いただきました。



「男女共同参画社会づくりに向けての全国会議」に登壇する長島職員　写真提供：内閣府男女共同参画局

Q.将来リーダーとして責任ある仕事をしたいかどうか（15～24歳の学生の回答）

	男性	女性	合計
全体	500人	500人	1000人
したい	18.0%	9.4%	13.7%
どちらかというとしたい	28.0%	29.0%	28.5%
どちらかというとしたくない	27.4%	31.8%	29.6%
したくない	18.2%	21.8%	20.0%
わからない	8.0%	8.4%	8.2%

「日本における女性のリーダーシップ2021」レポートより

６月29日には内閣府男女共同参画局が主催した、「男女共同参画社会づくりに向けての全国会議」にアドボカシーグループ・リーダーの長島職員が登壇。レポートで明らかになった「リーダーになりたい」女性の少なさとロールモデルがいないという調査結果を説明しました。また、女性がリーダーとして政治や経済、コミュニティなどで活躍するための教育が果たす可能性について指摘し、他のパネリストとともに女性が社会のチェンジメーカーとなるための道筋について意見を交わしました。

プランでは今後も引き続き、「女性がリーダーとして社会を変革する存在となるためにどうすべきか」の提言活動を行っていきます。

国内

「女の子のための居場所・相談」プロジェクトから見えてきたこと

プラン・インターナショナルが「女の子のための居場所・相談」プロジェクトを立ち上げ、女の子のための安全な居場所「わたカフェ」を開設してから一年が経過しました。コロナ禍で、なかなかオープンできない日が続きましたが、対面せずに相談できる場として開始した「女の子のためのチャット相談」では、これまでに９８７件（７月末現在）の相談があり、相談内容から「包括的性教育※の重要性」が見えてきました。

例えば、性の同意や被害については「嫌われたくない。関係性を壊したくない」と自分の気持ちを我慢することで、自身を苦しめているようです。また、「妊娠したかもしれない」という想定していなかった課題に直面したとき、どのような選択肢があるのか学ぶ機会がなかった女の子が多く、誰に相談したら良いかわからず、本人が納得できない結果が生まれてしまう場合もあります。

プラン・ユースグループが行った調査（下記参照）でも、どのような性教育を受けてきたかということに対して「恋人との良い人間関係の築き方」や「性的同意について」の教育を受けた人は少ないということが分かりました。「性に関する知識」だけでなく「自分の体のことは自身で決められる」ことを知っておくことはとても重要です。

国内支援事業グループは、専門職の知識を活かして、女の子たちが必要とする支援につなげることも目的としていますが、同時に「自分の体について決められる権利がある」ことを伝えていきます。彼女たちのサポーターであること、いつでも相談できる環境があることを心がけています。

Q.これまで学校でどんな性教育を受けてきましたか？（n＝1,050）

	男性	女性	合計
妊娠について（例：妊娠後の体の変化）	77.1	85.0	81.0
安全な避妊方法について（例：コンドームや緊急避妊薬）	74.7	74.5	74.6
性感染症とその予防について	79.4	88.2	83.8
自分の体の名称と機能について（性器の詳しい仕組みも含む）	59.8	62.1	61.0
プライベートゾーン（水着で隠す部分）を他人に触れさせないこと	25.5	23.6	24.6
性的同意について（性的な行為の前に相手の意思を確認すること）	47.8	52.0	49.9
恋人との良い人間関係の築き方	29.1	28.0	28.6
自分の体のことは自身で決められる権利があること	39.8	41.7	40.8
人権について（人間は各々違う価値観を持ち、大切にされるべき）	45.7	53.3	49.5
ジェンダーの多様性、LGBTIQ+ について	46.3	45.7	46.0
SNS を含むインターネットの安全な使い方	51.0	61.7	56.4
その他	0.2	0.2	0.2
性教育を受けてない	1.0	0.8	0.9

（%）

プラン・ユースグループが行った「ユースから見た日本の性教育の実態調査報告書」より

※包括的性教育とは、妊娠、避妊、性感染症という限定的な生殖教育だけでなく、人間の尊厳や他人を尊重することなどを網羅的に学習するための教育



店内ポスターでも寄付を呼びかけていただいています

全国のイトーヨーカドーで グローバル・プロジェクトへのレジ横募金を開始

株式会社イトーヨーカ堂は、2021年9月1日(水)～11月30日(火)の3カ月間、全国のイトーヨーカドー131店舗で「学校とコミュニティの防災」プロジェクトのための募金を実施します。気候変動の影響による災害リスクが高まるなか、人口も多く、災害に脆弱な地域が密集するアジアでは、毎年多くの子どもたちが自然災害の被害を受けています。この度イトーヨーカドーにて集められる募金は、バングラデシュとネパールの2カ国において、プランが行政や地域の人々と協力しながら推しすすめる学校を中心とした防災活動や、子どもや若者たちがジェンダーの違いに関わらず、さまざまな脅威から身を守るスキルを高めるための活動に充てられます。
お近くの店舗にお立ち寄りの際にはご協力をお願いいたします。

たくさんの方から「PLANレガシー1%クラブ」※へ関心を寄せていただいています

プラン・ニュース117号に同封の「PLANレガシー1%クラブ」のフライヤーをご覧になった方からたくさんの参加申し込みをいただいています。8月末の時点で、お申込者は70人を超えました。ご関心をお寄せいただき、ありがとうございます。引き続きご登録をお待ちしています。

「PLANレガシー1%クラブ」へお申し込み下さった方の声を紹介します。

●遺言書を作成しておくことは「死」を考えることではなく、これから先の「生きる」を考えることだと思います。
(60代 女性)

●将来的に自分や家族に少しでも遺産があれば寄付したいと考えています。自分の人生の最後までプランに少しでもお役に立てればと思いました。
(50代 女性)

●こうした相談をできるところがあるのは、大変嬉しく有り難いです。
(60代 女性)



※遺贈・相続財産の寄付への関心の高まりを受けて、「資産の1%の寄付でも、子どもたちの未来を応援する力は大きい」という思いから、関連情報の提供や手続きのサポートを目的としたメンバーシップを発足しました。 詳しくは 「PLANレガシー1%クラブ」で検索してください。

あなたも参加しませんか?

プラン支援者の会からイベント開催のお知らせ

「プラン支援者の会」は、全国各地の支援者の皆さまが任意で活動を行っています。「ほかの支援者のみなさんと話がしたい」「志を同じくする方々と楽しく活動がしたい」とお考えの方、お近くのプラン支援者の会に参加してみませんか?

プラン・インターナショナルのウェブサイトから、各会のページにリンクできます
https://www.plan-international.jp/supporter/plankai

プラン千葉

秋の例会

■ 日時：10月17日(日)　13時15分～16時30分
■ 会場：千葉市民会館　会議室　千葉市中央区要町1-1
■ 内容：チャイルドへの手紙書き　ほか　■ 参加費：500円
■ 定員：先着30名(新型コロナウイルスのため定員が15名になる可能性があります)
■ 申込締切：10月15日(金)　■ 連絡先：前田　Mail：e_maeda@yellow.plala.or.jp

※新型コロナウイルスの感染状況によっては断りなく中止となる場合があります。

「プラン・ラウンジ」オンライン活動報告会を開催しています

プランの活動を知っていただくための「プラン・ラウンジ」は現在オンラインで開催しています。

今後の開催テーマは以下を予定いたしておりますが、変更になる場合もございます。詳細は開催月初めにウェブサイトに掲載いたしますのでご確認ください。

【11月】ジェンダーと保健
2021年11月20日(土)
【12月】学校とコミュニティの防災
2021年12月18日(土)
【1月】プランの活動
2022年1月21日(土)
【2月】女性性器切除から女の子を守る
2022年2月19日(土)

■ 支援者の会に関するお問い合わせ先：
プラン・インターナショナル支援者の会担当 Mail: P-kai@plan-international.jp

※「プラン・ニュース」No.119は、2022年4月上旬にお届け予定です。

ギフト・オブ・ホープに たくさんのご参加ありがとうございました!


「外遊びセット」のフラフープで遊ぶ子どもたち

2020年度の年次報告書に同封していた「ギフト・オブ・ホープ～子どもたちにクリスマスプレゼント・お年玉を贈ろう」は、今回も大勢の方にご参加いただきました。ラオスでは39の小学校、10の幼稚園に「絵本セット」と「外遊びセット」として、フラフープ、絵本、文房具が贈られました。

「今日はとてもうれしい日。学校にあった本はもう何回も読んでしまったし、破れて読めなくなっている本もあったけど、今日また本がたくさん届きました」「フラフープで遊ぶのはとても楽しい。安全だし、運動になる」と子どもたちからもコメントが届きました。皆さまからの温かいご支援に感謝を申し上げます。


「絵本セット」で届いた絵本を楽しむ子どもたち

お手紙はオンライン手紙送信フォームをご利用ください



オンライン手紙送信フォーム便箋の一例

プラン・インターナショナルは2021年9月現在、郵送によるお手紙の受付を停止し、オンラインでのお手紙のみ受け付けています。オンラインによるお手紙は郵送時間も短縮されるうえ、紛失のリスクがなくなる、郵送コストも節約できるなどのメリットがあります。オンライン手紙送信フォームでは、季節にあわせた定型文や便箋を用意していますので、楽しんでお手紙を送っていただけます。

コロナ禍以前は、年間約3万通にのぼる手紙の業務(受付、翻訳、発送)の多くは、ボランティアの皆さまに担っていただいていましたが、国内の感染状況を考慮し、2020年2月末より事務局でのボランティア活動を休止しています。現在、限られた体制で手紙の翻訳・発送作業を進めています。皆さまのご理解をお願いするとともに、オンライン手紙送信フォームをご利用くださいますよう、ご協力をよろしくお願いいたします。

手紙送信フォームはこちらから
https://www.plan-international.jp/form/letter_sc/

オンライン手紙送信フォームはこちらから

プランへの寄付となる商品のご紹介

キャンペーン期間中の対象商品の購入が寄付に繋がります

森永製菓株式会社は、2008年より「チョコレートを食べる人も、カカオの国の子どもたちも笑顔にしたい」という思いのもと、「1チョコfor1スマイル」活動を開始し、売上の一部を使って「カカオの国の子どもたち」の教育環境を改善するプロジェクトをご支援くださっています。

2021年9月2日（木）～10月9日（土）までの特別期間中は、対象商品の売上の一部がプランに寄付されます。
対象商品はこちら
https://www.morinaga.co.jp/1choco-1smile/

プランでは、「1チョコfor1スマイル」を通じて、ガーナ、エクアドル、カメルーンなどのカカオ生産コミュニティに暮らす子どもたちの教育環境改善を目指し、教室建設、トイレ設置、教師トレーニング、新型コロナウイルス感染症対策などの活動を進めています。

「1チョコfor1スマイル」対象商品例



国際ガールズ・デーのイベント

プラン・インターナショナルの活動地域から

10月11日の国際ガールズ・デーは、各国でさまざまな活動が行われています。アートやスポーツ、劇などのイベントのほか、メディアからの発信、政府への提言なども積極的に実施されています。昨年は新型コロナウイルス感染拡大の影響でリアルイベントができませんでしたが、近年（2017-2019年）行われた国際ガールズ・デーを紹介します。

Dominican Republic



大統領令で「全国女の子の日」発足

2017年、ドミニカ共和国では、ユースグループの女の子が議会を訪れ、早すぎる結婚禁止の同意と約束を求めました。当時のダニーロ・メディナ大統領は大統領令により、10月11日を「全国女の子の日」とすることを宣言しました。



Malawi

全国ネットの放送局から発信

2017年、マラウイでは女の子たちの代表が国内に25の支局を持つ全国ネットの放送局を訪問。国際ガールズ・デーについてのインタビューを受けたほか、放送機器の使い方を学び、情報発信にも挑戦しました。

Vietnam



女の子たちが意思決定プロセスに参加

2018年、ベトナムでは100人の女の子たちが、政策決定に関わる国会議員や政府のリーダーたちと面会。公共の場における女の子の安全や、早すぎる結婚とその影響について議論を交わしました。

Nepal



アートを通じて発信

2019年にネパール全活動地域で「女の子のアートプロジェクト―Art is Power」を芸術財団とともに行いました。女の子たちは、絵や音楽、詩などの芸術的表現を通じ、日常的に直面している不平等についての思いを発信しました。



Uganda

劇で早すぎる結婚の影響を訴える

ウガンダで2019年に行われたイベントでは活動地域の子どもたちや若者たちが参加し、早すぎる結婚の影響を警告する劇を行いました。また職業訓練プログラムに参加する女の子たちが作った商品も販売しました。

Ghana



若者議会が発足

2019年、ガーナでは、国立青年局と協力し、若者議会を正式に発足させる国際ガールズ・デーのイベントを開催しました。メンバーの半数以上は女の子たちで、若者たちの声を聞くためのプラットフォームを確立しました。

プランのSNSをフォローしてください

プラン・インターナショナルのFacebook、Instagram、Twitterで活動国の情報や事務局の日々のあれこれを発信中！

※「国際NGOプラン・インターナショナル」で検索してください。



表紙写真ストーリー

希望に満ちた瞳の女の子は東ティモールのサンティナさん11歳。学ぶことが大好きです。2018年の国際ガールズ・デーのイベントの一環で首相の仕事を体験したとき、「私は将来、東ティモールの首相になりたいと考えています」とタウル首相に話しました。サンティナさんは女の子たちが将来の意思決定者となるためには、リーダーが率先して彼女たちの社会参加を促す政策を打ち出すべきだと考えています。

ご意見、ご感想をお寄せください

プラン・ニュース118号アンケート

PLAN NEWS
2021 AUTUMN NO.118
表紙写真：東ティモール

公益財団法人プラン・インターナショナル・ジャパン
〒154-8545 東京都世田谷区三軒茶屋2-11-22 サンタワーズセンタービル10F
TEL：03-5481-6100　FAX：03-5481-6200
www.plan-international.jp

※当面の間、ご連絡はウェブサイトの「お問い合わせ」フォームよりお願いいたします。